

高柳 泰宏・三浦 修・林 俊之・
南園 義一・戸田 智博・長崎 進

当センターにおいて、1969年1月より1992年12月までの24年間に開腹手術を施行した消化管悪性リンパ腫は胃原発19例、小腸原発7例、大腸原発2例の計28例であり、消化管悪性腫瘍手術例数の1.1%を占めていた。平均年齢は58歳で、性別は男性17例、女性11例と男性に多く見られた。

今回、臨床病期、深達度、組織型、予後を確認し得た胃原発14例、小腸原発4例、大腸原発2例について検討した。

臨床病期はNaqviの病期分類に、組織型はISG分類に準じた。予後を左右する因子、治療方針等について若干の考察を加えて述べる。

51. 肝組織血流および胃粘膜血流におけるエンドセリンの関与について

(東女医大成人医学センター、
青山病院消化器内科)

栗原 毅・秋本真寿美・黒川 香・
石黒 久貴・新見 晶子・前田 淳・
重本 六男・山下 克子・横山 泉

胃粘膜血流量はET-1でET-3に比し有意に低下した。このように一般にET-3に比しET-1が血管収縮作用が強いが肝臓では逆の現象が認められた。それ故、外因性ET-3の肝組織血流量低下のメカニズムを考えると、ET-3の直接的な血管収縮作用の他、何らかの血管収縮因子を介しての反応とも考えられた。今回の検討では肝組織血流量はET-1では程度は軽いものの、その直接的作用により低下する。一方、ET-3では直接的作用のみならずTXA₂の合成遊離を司り、その反応で肝組織血流量が著名に低下することが示唆された。

52. 人間ドックにおける超音波検査の意義—中山メディカルクラブに於る超音波検査の現況—

(東女医大消化器内科 消化器外科、
*中山メディカルクラブ)

島 穂高・斉藤 明子・小幡 裕・
小林誠一郎・長谷川利弘*・矢端 正克*・
矢川 裕一*・中山 恒明*

当施設における超音波検査は、1980年8月以降の12年間に2,057例、延べ6,908回行われている。スクリーニング検査の対象臓器は主として肝胆膵腎脾であり、肝胆腎脾は95%以上の被検者で描出されたが、脾に関しては71.5%と低く超音波検診の問題点と考えられ

る。発見された悪性疾患は25例1.2%であり、その中で肝細胞癌が21例を占め全症例の1.0%と高率であった。通常の間ドックでの発見率は約0.03%であり、この様に高頻度に発見されている要因としては、会員が主として男性であること、長期の逐年検診を行っていることが考えられた。また、肝障害患者に対して通常の外来と同様に定期的超音波検査が行われるようになった1985年以降は全て3.5cm以下で発見され、切除例も増加し、最長生存の1例は11年の現在健在である。

53. 下血を契機とした直腸子宮内膜症の1例

(府中医王病院消化器外科、*昭和大学

医学部病理)

菊池 哲也・島田 幸男・押淵 英晃・
都筑 康夫・佐川 文明*

子宮内膜症は、子宮内膜組織が異所性に増殖する疾患であるが消化管に発生し、下血を呈するものは比較的稀である。最近我々は直腸子宮内膜症の1例を経験したので報告する。

症例は44歳女性、下血、下腹部痛を主訴に当院を受診。緊急大腸内視鏡検査にて直腸に鶏卵大の血腫状腫瘤を認めた。その後、再度の内視鏡検査では、腫瘤はなく、陥凹を有する隆起性病変を認めたが悪性所見はなかった。以前婦人科で子宮筋腫、子宮内膜症を指摘されていたことがあるため子宮筋腫の手術を行ったところ、術中、直腸に子宮筋腫が癒着しており、剝離中、直腸との交通が認められたため、単純子宮全摘術と直腸楔状切除を施行した。組織学的には、直腸は子宮腺筋症の像であった。

直腸子宮内膜症は、術前診断が困難な場合が多く、また、しばしば癌との鑑別が問題となる例が多く、術式に苦慮する。今回我々は比較的稀な、直腸子宮内膜症の1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

指定講演 食道表在癌の治療方針

(東女医大消化器外科) 江口 礼紀

教室で経験した食道表在癌切除226例および非切除33例の治療成績から食道表在癌の治療方針を検討したので報告する。深達度sm₂以上、n(+)例の頸部上縦隔再発が外科治療上の問題点であった。腫瘍径1.5cm以下では28例中O-IIc型の1例にリンパ節転移を認めただけで全例生存しており、また腫瘍径を問わずO-IIb型に転移は無く、内視鏡下粘膜切除などの局所治療が可能と思われた。腫瘍径1.5cmを越えるO-I型およびO-III型ではリンパ節転移が高率にみられ徹底郭